

70年前に設立され UC の中では狭い方とはいえ、広々としたキャンパスその上 1984 年のロサンゼルスオリンピックの会場の一部として整備されたこともあって、会場の印象は全体的に良かった。また校内の学生寮に宿泊したため街中に出歩く機会は逸してしまったが、米国一の犯罪都市と言われたロサンゼルスでも、UCLA の校内は夜でも警備が行き届き、布教活動に会うぐらいで安心感があつた。

地理的歴史的にメキシコに近いロサンゼルス土地柄から、二日目の夜に UCLA 校内のレクリエーションセンターの一角のフィールドの上で開催されたバンケットはメキシコ風で、メキシカンバンドの生演奏を聞きながら

テキーラとメキシコ料理で夜遅くまで歓談し、知己と交友を深めることができた。

今回の国際会議出席は、自らの研究発表を計 3 件行いかつ付随して開催した VAMAS 極低温構造材料技術分科会の幹事と事務局の役目及びその他を、科学技術庁の本庁勤めを併任しながら果たしたことになる。準備期間を含めてよく無事だったというのが正直な感想である。改めて、各方面の方々の御協力に感謝します。

最後に、この国際会議出席にあたり日本鉄鋼協会第 11 回日向方学術振興交付金の援助を受けたことを付記する。

### 編集後記

平成元年の粗鋼生産量は約 1.08 億 t と見込まれ、鉄鋼業界は 9 年ぶりの高水準の生産で活況の内に平成 2 年を迎えた。数年前の悲観的な 9000 万 t 説は影を潜め、重厚長大の復権が叫ばれるこの頃である。鉄鋼業に携わる一人として、誠におめでたい新年を迎えることができた。しかしながら、本誌の投稿者の主体をなす大学、国公立研究所、企業の鉄鋼分野の研究者数は減少しつつある。ある製鉄会社の研究所の例では、昭和 60 年から平成元年末までの約 5 年間で鉄鋼分野の研究者数は 14% 減少し、新素材を主体とする新規分野の研究者数（エレクトロニクス分野を除く）は倍増して鉄鋼分野の研究者数の 60% に達している。

これらの変化が本誌の論文にどのような変化を与えつつあるか？ 本誌に掲載された論文と技術報告につ

いて、昭和 60 年と平成元年間で比較した。本誌の掲載論文（技術報告と論文）を鉄鋼分野に関するものと新規分野に関するものに筆者の独断で大別した。昭和 60 年では、鉄鋼分野の論文が 95% でそれ以外が 5% である。平成元年では、これらの値は 74% と 23% (3% は分類不可) である。平成元年度は複合材料の特集号が発行されているので、この影響を除いて集計すると 81% と 16% となる。いずれにしても、本誌の多角化は製鉄会社と同様に急速に進んでいることが認められる。

本誌が無機系の材料工学の分野を網羅する一流誌となり、その中心部に鉄鋼分野が包含されるといった時代も夢ではないと思うのは筆者が独善的すぎか。

(T. F.)